

「文字と文化・文明の関わり」

ゲスト・ティーチャー授業

鈴木和夫

二〇〇二年十月十八日 於墨田区立本所小学校

皆さんこんにちは！

私は、ただいま、先生から、ご紹介をしていただいた、鈴木和夫です。凸版印刷株式会社に勤めています。

今日は、皆さんに「文字と文化・文明との関わり」という題で、特別授業をします。

皆さんは毎日、文字を使って何か文章を書いています。しかし、書いている時に、いちいち自分はどんな文字を使っているのかなどと、考えてはいませんか。

実は私も皆さんも、日本語の文章を書く時には、「漢字、仮名混じり文」を使っています。

その場合に使っている文字は、漢字と仮名です。仮名には「カタカナ」と「ひらがな」があることは、よく知っていますね。最近では文章の中に、数字や記号や、英語をはじめ外国語の単語なども混ぜて使うことが多くなりましたが、そのことはちよつと横に置いておいて、今日は「漢字、仮名混じり文」の基本的な話を中心に「文字と文化・文明との関わり」についての話をします。

おそらく皆さんは「漢字」や「カタカナ」や「ひらがな」といった普段使っている文字が、いつ頃、どこで、どうやってできたのかを、そして、それらの文字が私たち日本人の文化・文明にどのように関係してきたのか、また、現在においても関係しているのかを、十分に知っている人は少ないでしょう。そこで、「漢字」は、どこで、どうやって、いつ頃に開発されたのか、ということから話を進めようと思いますが、その前にその前提となる、われわれ人間社会の歴史上の記録で、ある程度分かっている古代の文化・文明社会のことについて、少し、勉強してみたいと思います。

われわれ人間にとつてだけでなく、植物、動物という生命を持った生物には、「水」は絶対に欠かすことができないものです。水がなければ生命は涸れてしまいます。広大な砂漠地帯には植物も生えていないし、動物も棲息していません。たまたま、オアシスがあればそこには樹木もあり動物もいます。水があるからです。

そこで地球上に住む大部分の人間が、水を求めて大きな河の流域に集まってきて、農耕や牧畜をしながら暮らすようになり、自ずから、そこに大集落ができ上がってゆきました。

(四大文明の地図)

具体的には、この地図にあるように、中近東を流れる大河で

あるチグリス河とユーフラテス河に挟まれた肥沃な土地であったメソポタミア地方や、ナイル河の流域のエジプト地方や、インドの大河であるインダス河の流域のインダス地方、そして黄河や揚子江の流域の肥沃な中国地方の広大な土地に、人々は定着してそれぞれの独自の社会集団を形成して、生活を始めたのです。

しかし、水を求めて農耕や牧畜、漁労などはできても、これらの大きな人間社会では、広大な地域に大勢の人が集まって集団生活を始めたのですから、色々と世間の「決まりごと」などを共有しなければならぬし、何か発生した出来事も知っておかなければ、集団生活にまとまりができません。

しかし、それらの情報を通知したり、交換したりするには、近くににいる人たちとは喋る「話し言葉」でできますが、遠くにいる人たちには声は届きません。そこで馬などを走らせて、それに乗って知らせに行くとか、手真似を使って次々に知らせていったり、敵の来襲など緊急事態の時には狼煙を上げて危険を知らせるなど、地域社会がだんだん大きくなるに従って、大変に不便なことがたくさん起こってきました。

例えば、どんな困ったことかといえ、おそらく皆さんも経験があるでしょうが、十人くらいの人が集まって輪になり、一つの情報を次々と伝えて行き、それが最初の人のところに届いた時には、とんでもない違った話になっているといった類のもの

のです。遊びごとなら笑って済みますが、地域の大切な情報の場合には、口伝えや手真似による交信ではまことに心細いのです。

(絵文字・象形文字の発生とその変遷の図)

そこで人たちは工夫を凝らして「ある意味を持つ符号」を開発しました。それが「文字」なのです。

自然の物体の形、例えば人や魚や木などを写生して絵を描き、それを簡略化したり図案化したり、組み合わせたりして符号を作ったり、あるいは自然の諸現象を感覚的に捉えてそのイメージを描いて符号にしたりしまし。また、物の形を象った文字なので「象形文字」とも呼ばれています。そのような「文字」は、一つの文字が、ある意味を表すということから、「表意文字」としてスタートしたのです

ついでに後で出てくる「表音文字」というのがあるので、それを説明しておきます。

それは例えば、cとかpとかsといったように、例えばcという一文字では、意味や観念を表現できない、単に、発音を表すだけの文字のことを言います。皆さんお馴染みのアルファベット文字などはその類です。ただし後になって社会が複雑化するにつれて、色々な表現方法が必要となつて、表意文字が表音文字としても使われるようになった文字もあります。

そのようにして発明・開発された「文字」を石や動物の骨や亀の甲や粘土や木や竹などに彫つたり、押し付けたり、書いたりして、情報はどんどんと人手を通して次々と広範囲に、しかも、正確な情報が速く伝わるようになって、人々の知識は格段に豊富になり、知恵が新たな知恵を生むというスパイラル的な発展が始まり、活発な文化活動が行われ、質の高い文明社会ができたのであります。また、記録として後世の人たちに伝承されるようにもなり「歴史」が誕生したのであります。

先ほど、「文字」はどこでいつ、どのようにして創られたのかという問題を提示しましたが、どのようにしては、すでに答えを出しましたが、どこでの答えは、言うまでもなく先ほど地図で示した四つの高度の文明をエンジョイしていた地域の人間社会であります。

それらの文明はメソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明そして中国文明と言われ、総称して古代の四大文明と言われています。

そしていつ頃創られたのか、に対する答えは、それらの文明が栄えていた時代ですから、紀元前三〇〇〇年から二〇〇〇年くらいの頃、今から数えれば四〇五千年ほど前に文字は創られたこととなります。

古代文字について、もう少し詳しい話をします。エジプト文

明社会の所産である古代エジプト文字のことを「ヒエログリフ」と言いますが、それは、ロンドンの大英博物館に保存されている、ロゼッタストーンで見ることが出来ます。これはナポレオンがエジプト遠征をした時にたまたま見つけたものであります。

(ロゼッタストーン、ハンムラビ法典、甲骨文字など)

中国の漢字も物の形を写す象形から始まり、その元祖である文字が亀の甲や動物の骨に刻まれた「甲骨文字」を、北京の天安門広場に而して建っている中国最大の博物館である「歴史博物館」や台北の故宮博物院で見ることが出来ます。

インダス文字は現在残された解読資料がないために、いまだ解読されてはいませんが、絵文字の仲間であり、当時の王様の印章など色々と実物が残されています。

また、絵文字を細長い楔形くさびがた三角形の組み合わせで表現した文字がメソポタミアの「楔形文字」であり、これはパリのルーブル美術館に保管されている、石に刻まれたハンムラビ法典で見ることが出来ます。

一昨年の秋でしたか、NHKが四大文明展を東京、横浜などで、かなり長期間にわたって開催して、これらの本物を展示したので、皆さんの中には、それらを見た人も多いかもしれません。

しかし、ここで大変に重要なことを話します。

ただいま、私が説明しました四つの古代文字のうち、現在までその系統を引いて使われているのは、われわれが使っている甲骨文字の系統を引いている「漢字」だけであるということですね。

他の三つの文字は、幸いにして貴重な歴史的文化的遺産として残されてはいるものの、現在ではまったく使われていないのです。それはメソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明のいずれも、内部分裂や外敵の攻撃により消滅しました。その時に、それらの「文明圏の崩壊」とともに、その「文字」も使われなくなってしまったからであります。

それでは、漢字は中国固有の文字として、いつ頃から使われたかという確実な検証はできていませんが、少なくとも、殷の時代には使われていたことは、現存する甲骨文字から時代考証ができて、開発された時期は紀元前一〇〇〇年以上前であることは明らかであります。

中国は有史以来、殷から周、春秋、戦国、秦と、そしてさらにいくつかの国の興亡を経て、近くは唐、宋、元、明、清と、そして現在の中華人民共和国と、度々支配者の交代があり国の名前も変わりました。

中国文明が危殆きたいに瀕するような時代も全くなかったわけではありませんが、戦いのほとんどは、内戦によるもので、固有の

中国文化・文明は幸いにも本質的な変化を遂げるとか、また、消滅するようなことがなく、現代に引き継がれています。

従って、現在も漢字は中国固有の文字として存在し、「漢字文化圏」を維持しているのです。

ここらで文字と文化、文明とは、古代においても極めて緊密なつながりというより、全く一体であったことを示しているのが分かるでしょう。

今までの話で、中国文明・文化を支えてきているものは「漢字」であることが明白になったと思います。

さて、それでは漢字が日本に伝わった時期はいつ頃だったのでしょうか。

それは正確には分かっていませんが、二千年くらい前に日本と大陸との間には、すでに交流が始まっていたのではないかとされています。

その漢字で書かれた有名な中国の古典である『論語』『孟子』などは、中国の精神文化の真髄であり、わが日本にも渡来し、伝来した儒教や仏教とともに、古来からの固有の日本文化の中に溶け込んでいったことは、皆さんはすでに勉強したこととされています。

そのような精神文化だけではなく、中国の高い農耕技術や養蚕技術などが、朝鮮半島諸国を通じて、または、直接中国から渡ってきて、新しい日本の文化が発展していったのです。

交易が盛んになって、そのような影響を大きく受けるようになったのは、今から、およそ千五百年ぐらい前のことのようにです。

しかし、漢字で書かれた書物や資料が読めた人は、国を治めるお役人とか、貿易に携わっている商人のような、特別に勉強した人たちに限られていて、そのままでは、一般大衆の日常生活には役立たなかつたために、色々と工夫が行われ、古来の日本語の表記に「漢字」を使い易いようにする工夫が行われたのです。

先ほど、私は漢字は、元来象形文字からスタートしたと言いましたが、表音文字としても使われるようになり、また、その組み合わせで色々な漢字を創り、時代の変化に対応してきたようです。分かりやすい例をあげれば、ロンドンを「倫敦」と書くようなものです。

(表意漢字の「倫敦」以外の例)

日本人はこのやり方を上手に利用して、日本古来の歌集である『万葉集』をその方式で書いたのです。その文字を「万葉仮名」と言います。そのように固有の日本語を漢字で表現するこ

とを考え出したのです。

「万葉仮名」と言っても、いわゆる仮名文字ではなく漢字を表音文字として使ったのです。

(『万葉集』の一節 カタカナ、ひらがなの例)

だしました。例えば、伊の偏だけで「イ」を、そして呂の一部から「ロ」という文字、すなわちカタカナ(片仮名)を創りました。また別に、万葉仮名をくずして書いた漢字の草書体から、例えば、以から「い」を、波から「は」という具合にして、ひらがな(平仮名)を創りだしました。そして漢字と混ぜて使うことを覚えたのです。

この「漢字、仮名混じり文」によって、一般の大衆の人たちも、高度の文化・文明に触れることができるよう多くの人たちの知恵や知識や技術が、文字情報の形で伝達、伝承され発展して、現在の日本文化の重要な一つの要素になっていることを、皆さんに分かってもらいたいです。

(従来の十画、二十画の漢字「繁体字」の例と最近の中国の「簡体字」の例)

しかし、漢字は一つの字で、ある意味を持つという点では、極めて便利な文字ですが、一方、中国では文化の発展につれて、その漢字の文字数が増えて一万を遥かに超え、また、大変複雑

な文字が創られるようになって、十画、二十画といったものも珍しくなく、その点では、官吏や学者のように、特別に勉強した人たちはともかくとして、一般の人からはもつと簡単に略して、数も少なくしようという運動が、漢字の本家である中国でも起きて、色々と苦労しているようです。

(常用漢字)

わが日本でも、戦後に、極端に漢字の数を減らすことが、国の政策として行われました。昭和五十六(一九八一)年に作成された「常用漢字表」では、千九百四十五字が掲げられています。中国の一万を超える字数(中国でも『常用字』として二千五百字が規格化されています)とは、とても比較になりません。

皆さんが小学校で覚える漢字は、常用漢字の中でも特に使われることが多い文字が選ばれて、合計千六字になっていると思います。しかし、幸いなことは、われわれは「漢字・仮名混じり文」を使っていますから、漢字の数をある程度制限されても、少なくとも、日常の仕事にはあまり支障はありません。

どうです、日本人の昔の人は大した知恵を持っていたと感服しませんか。

ここでちょっと、話題を変えます。先ほど話しましたように、私は印刷会社に勤めていますので、文字に関しては大変に関心

を持っています。なぜならば、お客様から原稿用紙に手書きの文章を受け取って、それを活字で組んで印刷をするためには、熟練した職工さんが一日八時間働いてもA5判で十五ページくらいしか作れなかったのです。

昭和四十(一九六五)年頃のことだと記憶しますが、私はアメリカの印刷会社を訪れました。やはり活版印刷のための組版を作っているのですが、英語はアルファベットの二十六文字と数字と記号を併せても、せいぜい百字ぐらいしかなく、それを英文タイプライターのような、キーボードを叩くことで、どんなページが組み上がってゆくのです。

この機械をライノタイプとかモノタイプとか呼んでいますが、一口に百ページくらいは、簡単に組めるのです。このことは、アメリカを訪れる前から、ある程度知ってはいましたが、実は、ほんとうに驚いたことは、その頃のアメリカでは、ぼつぼつコンピューターによる組版の試験運用が始められていたのです。

いわゆるワードプロセッサです。

私はそれを見た瞬間に、「あ！……日本は大変だ。日本の文化は非常に遅れをとるな？」と、思ったのです。

なぜでしょうか？ 皆さんは実物を見たことがあるかどうか知りませんが、日本語タイプライターは、台の上に並べてある、

せいぜい二千字くらいの活字を目で選びながら、一本一本ハンドルで打ち出してゆくものです。それと英文タイプとの差を、私は直感的に頭に浮かべたのです。

(日本語タイプライターと英文タイプライターの写真)

情報の充実による文化への影響は直接的であり極めて大きいのです。情報内容のレベルの高さももちろんですが、いかにスピーディーに伝達できるか、その速度も大変大きな要素です。私はその時、このスピードの差のあまりにも大きいのに驚いたわけです。

しかし、日本人は素晴らしい人種だと思います。苦心惨憺をした末に、日本語ワードプロセッサを、とうとう開発したのです。このことによつて、日本の文化は息を吹き返したと私は考えています。

先ほど、私は『幸いなことは、われわれは『漢字・仮名混じり文』を使っていますから、漢字の数をある程度制限されても、少なくとも、日常の仕事にはあまり支障はありません。どうです、日本人の昔の人は大した知恵を持っていたと感服しませんか、と言いましたが、漢字は日本文化の根底を支えてきた立派な文字であつて、できれば、これからも日本や中国の古典が読める程度の文字数を知っておくことが、これからの世界の中の日本にとって大切なことの一つだと私は思っているのです。

ちなみに、『古事記』が約千六百字、『万葉集』が約二千六百字使われています。

参考までに言いますと、日本語ワープロの第一水準が、漢字、仮名、数字、特殊記号など併せて三千四百八十九字で、第二水準が三千三百九十字あります。

ここで、話の締めくくりをしましょう。

「文字と文化・文明」という題で、今日は話をしました。その中で私たちが毎日使っている「漢字」は、三千五百年くらい前に栄えた中国文明時代に創られ、今日に至るまで、時代の変遷に伴つて色々と変化はしたものの、わが日本文化にも大変に大きな影響を与え、われわれの先祖は、日本の固有の文化と、それらの渡来した中国文化とを、上手に組み合わせ融合させて、新しい日本の文化を創りあげてきたのです。その根っこにあるものは、実は、漢字であつたということです。

文字は文化・文明を支える根っこにある大切なものであること、そして、情報化時代、IT時代と言われる今口においても、その役割は少しも変わっていないことを、皆さんに知ってもらいたいのです。

これで終わります。

質問があれば、私の知っていることであれば、お答えします。

まだ少し時間があるようなので、もしも皆さんの中で、特別に「漢字」に興味を覚えて、もつと勉強してみたいと考えている人がいるならば、財団法人日本漢字能力検定協会という、文部科学省認定の協会が、検定試験を行っています。

七級から一級までクラス別があつて、最近では一年間に全国で百五十万人が受験しています。それに挑戦してみるのも、楽しみながら「漢字」を覚える一つのやり方かもしれません。

これに関する情報が欲しいならば、先生とご相談の上、経済同友会の事務局にご連絡ください。

これは決して、強制しているわけではありませんし、学校での国語の授業との関係もありますから、あくまで参考ということですから、その点間違いのないように、お願いします。